

Karakoram



pic. 1 ショーク河畔にて F 20号 2019

インダス河支流ショーク河畔のオアシス・スルモ。その背後の河岸段丘の上に立つと、フーシェ
谷の奥にカラコルムの巨峰マッシャブルムの神々しい姿が望めた。昼間は無味乾燥な褐色の世
界が黄昏時には一瞬色彩豊かに輝く。日本を遠く離れて僻遠の地で見た景色である。



pic. 2 天上の湖から天帝の峰を望む P 30 号 2015

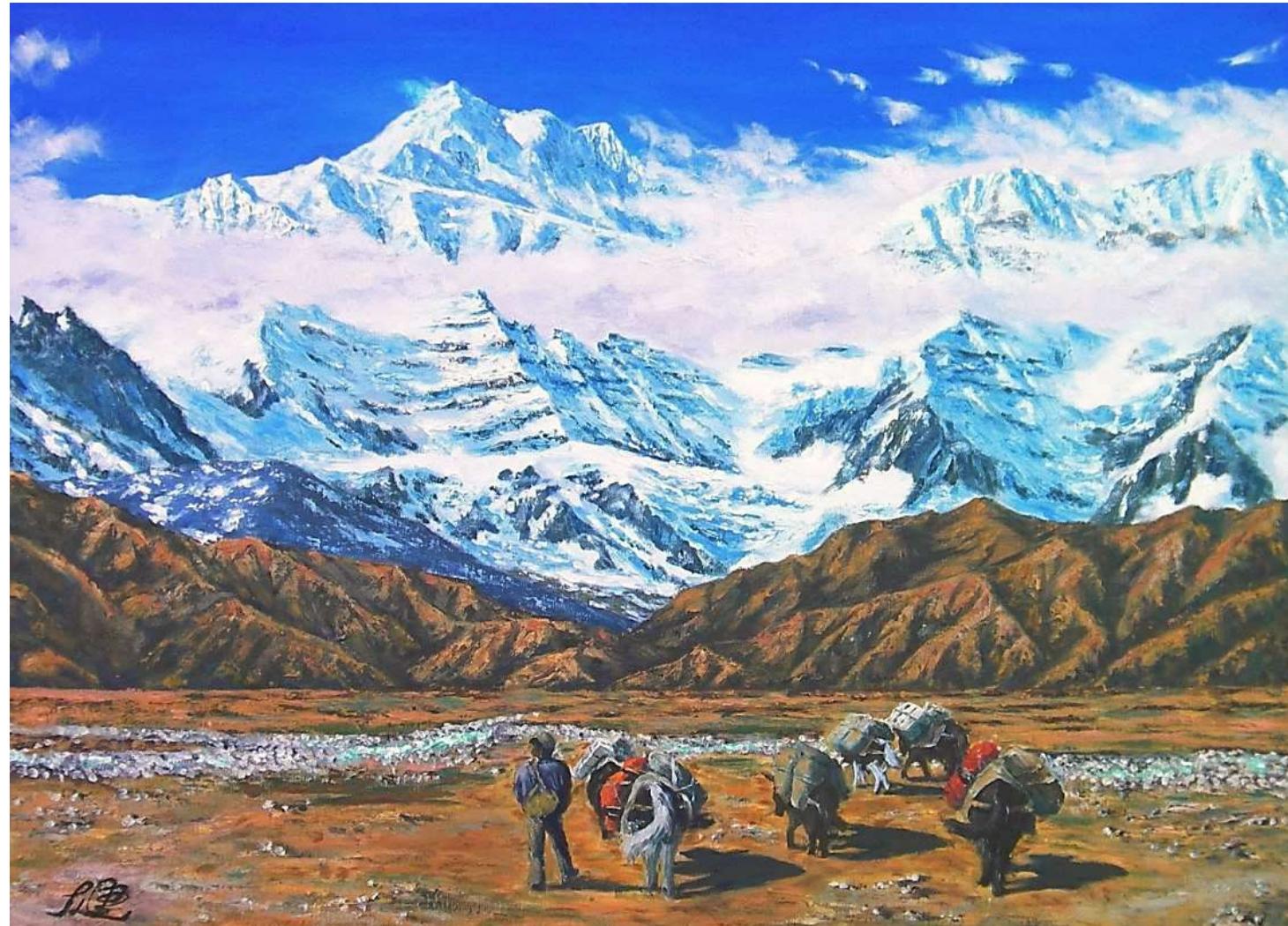
小さな峠を越えると標高 5000mにある天上の湖プマユム・ツォの湖畔に出た。南方に目指す天帝の峰・クーラカンリを初めて肉眼でとらえた。やっとここまで来たかと感慨ひとしおであった。

KulaKangri



pic. 3 空 へ P 30 号 2018

西氷河末端の凍結した氷河湖から登山を開始した。早朝、エンドモレーンの上に立つ。氷河から膨大なセラックが押し寄せ、そして抜けるような蒼い空高くこれから登ろうとしている西稜とクーラカンリ頂上が望めた。圧倒的な大自然を前に我々はなんと小さい存在であろうか。



pic. 4 東チベット・カンリガルポ山麓を行く P 20号 2008

最奥の村ラグーを後にして、広々としたコーギンカルカまで来ると、カンリガルポ山群最高峰のルオニイが仰ぎ見えた。我々の荷をベースキャンプまで運ぶヤクとヤク使いが前を進む。

KangriGarupo 2007



pic. 5 KG 2との出会い F 20号 2013

久しぶりの晴れ間を利用してアタ氷河の偵察を行う。氷河北岸の山腹に登ると、対岸にカンリガルポ山群で最も高い稜線上に巨大なKG 2が見えた。「あれに登ろう！」とその時思った。この2年後にそれが実現することになる。

KangriGarupo 2007



pic. 6 アタ氷河の偵察を終えて M 20号 2009

ルオニイとそれに続くKG2、KG3の偵察を終えて、キャンプへ引き返す。午後になってガスが湧き始めた。来るべき日の再会を期して山々を振り返り、別れを告げた。